

# イプセンの劇的アイロニー(二)

—— グレーゲルスと野鴨の関係(下) ——

毛 利 三 彌

## 四

第四幕の始まり方は第二幕のそれに似たところがある。

ギーナとヘドヴィクがヤルマールの帰りを待っており、間もなくヤルマールは戻る。時刻も共に、北欧の冬ではすぐにランプを灯すようになる午後過ぎである。舞台の明るさについてのイプセンの詳細な計算に関しては、つとに指摘されているから、ここでことさらに触れる必要はなからう。ギーナがランプを灯してから覆いをつけたりとったりするのは、彼女の内面の動揺を隠すためであり、この家は薄暗いというグレーゲルの比喩的表現を文字通り受け取る散文的感受性に由来するが、しかし、同時に、部屋の明暗がヤルマールの感傷的な悲嘆や、グレーゲルスの滑稽な落

胆をより際立たせる効果を狙っているのである。

間もなくグレーゲルが登場する点でも、第二幕と第四幕は類似する。そして、その類似の本質は、実はグレーゲルス登場以前の場面は偏えに彼の登場そのもののためにあるというところにある。そのことは、両幕におけるグレーゲルス登場のきっかけに明確に示されている。第二幕で彼の登場の仕方は次のようになっていた。

ヤルマール(笛を突然やめてギーナに手をさし出し、感動の面持で言う。)たとえ家は狭く貧しくとも、ギーナ、ここが我家だ。そう、幸せな家庭だ。

(彼は再び笛を吹き始める。途端に入口のドアに

ノックの音。)

ギーナ (立上って) しっ、エクダル——誰れか来たようよ。

ヤルマール (笛を本棚において) ほうら、また!

(ギーナは入口を開ける。)

グレーゲルス (入口で) ごめん下さい——

ギーナ (やゝたじろいで) あゝ!

グレーゲルスのノックの音はヤルマールの自己満足を邪魔する。しかしその音に驚くのはこれからグレーゲルスによって過去をあばかれることになるギーナである。この登場のきっかけはそれ自体のうちに、結果的にヤルマールの感傷的な家庭を破壊することになるグレーゲルス出現のアイロニーを明瞭に感じとらせるだろう。この巧妙さは、しかしながら、いささか見えすいていもいる。

この見えすき方に、イプセンは気づいていないのだろうか。グレーゲルスのアイロニカルな役割については、第一幕終りの彼の使命遂行の決意と、第二幕初めのヤルマール一家の自己満足性の描写のつながりにおいて、すでに明白に示されていた。グレーゲルの登場でことさらにそのことを強調してみせる必要はない。その必要がないからこそ、見

えすいたものになるのである。

実は、イプセンの意図はこの見えすき方の逆用にあるのではないか。つまり、その見えすき方はこの第二幕でのグレーゲルス登場の仕方に対して我々の特別な注意を引き、それがために、第三幕でのヴェルレの登場、また第四幕でのグレーゲルス及びセルビー夫人の登場の際、各場面の共通性に我々は思ひいたるという効果である。第四幕におけるグレーゲルス登場時の状況は、第二幕のそれと全く同じである、ただ各々の立つ立場は正反対ではあるが。

ヤルマール 一体——これからは家を立て直す夢はどうなるんだ? 俺はソファに座って発明にふけているとき、それが俺の最後の精力までくいつくしてしまおうだろうと感じていた。俺は、俺の発明の特許を手にした途端——その日が——俺の息をひきとる日だと考えていた。そしてお前は、今は故き発明家の裕福な未亡人として暮すというのが俺の夢だった。

ギーナ (涙をふいて) あゝ、そんなこと言わないでエクダル。未亡人になってまで生きる日がけして来ませんように、神様!

ヤルマール あゝ、あれもこれも、もうすべてがおしまいだ。すべてが！（グレーゲルス・ヴェルレが静かにドアを開け、顔をのぞかせる。）

グレーゲルス 入っていいかい？

ヤルマール あゝ、いいよ。

グレーゲルス （輝いた満足そうな表情で歩み寄り、手をさしのべる。） さあ、親愛なる諸君——！

（交互に二人を見て、ヤルマールに囁く。）

じゃあ、まだ済んでいないのか？

グレーゲルス登場の際のヤルマールの悲嘆に含まれている感傷性は、第二幕での自己満足の感傷性と同然である。そして、両場面共に、グレーゲルスはヤルマールの真の姿から眼をそらす。だが、この第四幕でのグレーゲルスの出現は、そのアイロニーの見えすぎ方より、むしろ、彼の滑稽さそのものの表現を意図しているというべきだろう。彼の滑稽さのくも執拗なくり返しは、殆どグロテスクなものであるとして我々の眼に映るに違いない。「君の中には非常に多くの野鴨的なところがあるよ、ヤルマール」というグレーゲルスの言葉がくり返されるとき、それはヤルマールと野鴨との対比を越えて、殆ど直接にグレーゲルスの内面の

野鴨的なもの——虚偽性——を明示するのである。

ここで医者レリングが再登場する。何故彼がここに現われるかの理由は判然としない。彼はグレーゲルスに「一体、本当にこの家で何をしたいのですかね」と尋ね、グレーゲルスが「真の結婚生活を築きたいんですよ」と答えると、「子供に気をつける」と言うのだが、何故わざわざここで子供にふりかかる危険を口にするのかも明瞭ではない。事実、ギーナもグレーゲルスもそれを疑問に思う。レリングはヘドヴィクが声変りの時期にあり、おかしなことを思いつく年頃なのだと言うが、ここで彼女の話は殆ど前後との関連なしに出されているのである。

レリングの言葉が、後のヘドヴィクの自殺への伏線としてあることは言をまたない。しかし、ヘドヴィクとグレーゲルスとが、この家の他のどの二人より親密な関係を結んでいることを見てきた我々は、ここにヤルマールやギーナへの警告よりむしろ、グレーゲルスに対する意味合いをこそ感じるのである。それはレリングさえも理解していないグレーゲルスに関する奇妙さの感じにつながる。これまで実際に「おかしなこと」を思いついているのは声変り期のヘドヴィクではなく、むしろ大人のグレーゲルスであった。その奇妙さの感じをヘドヴィクはたえず感じていた。ヘド

ヴィクの自殺にしても、その直接の動機づけである野鴨殺しを示唆するのは他ならぬグレーゲルスである。このことは、裏返せば、グレーゲルスは、外観こそ大人であれ、実はヘドヴィクと同じ思春期の青年だということになる。

グレーゲルスの年齢は作品中明確に示されていない。

しかし第一幕で学生時代の親友であるヤルマールとの再会が十六、七年ぶりだといっているから、少なくとも三十才は越えているとみてよいだろう。ヘドヴィクが第二幕において、ことさらに明後日十四才となるといわれているのは、ヤルマールの結婚生活の長さに関係すると同時に、見かけより年上にみえる身体の大きな十四才の少女の言動が殆ど十才前後の子供のようであること、つまり、ヘドヴィクの精神年齢が肉体年齢より異常に幼いこと、或いは、純真であることを示したいからだった。我々はすでに、グレーゲルスの異常さを十分目にしてきた。第三幕の終りには彼の自殺のほめかしさえ耳にした。従って「彼女は声変りの時期なんですよ、おやじさん」というレリングの言葉はそのままグレーゲルスについての説明として我々に感じられても当然であろう。

自分がヘドヴィクの父親と思っているヤルマールは感傷的になって叫ぶ。

ヤルマール あの子が俺のところにいる限り——！俺のこの頭がこの世にある限りは——！

(ドアにノックの音)

ギーナ しつ、エクダル、戸口に誰れか来たわ。

(呼ぶ) どうぞ！

(セルビー夫人が外套を着たまゝ入ってくる。)

ヘドヴィクだけが生き甲斐だというヤルマールの言葉をさえぎって入ってくるセルビー夫人の登場の仕方は、第二幕のグレーゲルスのそれと同じく見えすいている。しかしここでも、この見えすき方には別の意図がある。即ち、セルビー夫人がヴェルレは盲になりかけていると言いついたときのグレーゲルスのあわてかたの強調のために、彼女の登場を印象づける必要であるということである。

セルビー夫人 ……わたくし、けしてあの人を棄てませんわ。他の誰れもできないように、あの人につくすつもりですわ。わたくしにはそうできるんです。何故って、あの人はやがて一人では生きていけなくなるんですから。

ヤルマール 一人で生きていけない？

グレーゲルス（セルビー夫人に） え、え、その

ことは今は黙って下さい。

セルビー夫人 隠す必要はもうありませんわ、あの人は隠したがっていますけど。あの人、盲になるんです。

何故グレーゲルスはセルビー夫人の口をとめるのか。ヘドヴィクの出生に関する疑問を何故ヤルマールに抱かせたかないのか。言うまでもなく、ヘドヴィクが我子ではないと知ったときのヤルマールの絶望を思いやるからだろう。従って、そのことにグレーゲルスの思いやりこそ見るべきで、彼を批難するのは当を得ないということになるかもしれない。しかしながら、このグレーゲルスの「思いやり」には、単に普通の人情としてすませるわけにはゆかないものがある。ここで殆ど不覚にも、見せた人間的性情は、実は彼の全行為の虚偽性を暴露するものに他ならないからである。ここにあるはヤルマールへの思いやりではなく、徹頭徹尾自己中心の心情だからである。

グレーゲルスがこの家で求めている理想とは真の結婚生活活のほゞであった。それは虚偽に直面し、それをのり越え

た真実を礎とする男女の結びつきのはゞである。グレーゲルスが自己の人生の使命としたことはヤルマールの結婚生活に潜む虚偽の暴露に基をおく。若しそうなら、彼はヤルマールの結婚生活のすべての虚偽をまづ明かすべきであろう。それなのに、彼はここでヘドヴィクの出生の秘密を隠そうとする。これは彼自身の理窟に合わない。ヘドヴィクこそヤルマールの結婚生活の虚偽そのもの、その証しともいうべき存在ではないか。彼がヘドヴィクのことを思いやっているというのも当たらない。グレーゲルスは、ギーナのことを念頭におかないと同じくらいヘドヴィクのことも念頭にはおいていない。そのことは、彼が彼女と親しくなることとは全く別のことである。彼がヘドヴィクのことを思いやっているならば、あとで起る彼女の自殺行為はなかったはずである。

グレーゲルスの要求する「理想」とは理想でもなんでもない。ヤルマール救済とは自己救済以外のなにものでもない。このことはすでに明らかであった。ヤルマールをあまりに絶望させ、彼の救済を不可能にすることはこの自己救済を放棄することになる。彼のこの虚偽性が再び示されるとき、それはより一層の深さを我々にうかがい知らせるのである。ヘドヴィクの虚偽を明かすことはグレーゲルス自

身の虚偽を明かすことである。彼女の存在のあり方がそのまま彼の存在のあり方だから。彼は自己の存在の先天的虚偽性を知っており、それを絶望的に払拭しようとしている。そして絶望的であることを知りながらなおかつ努力するという矛盾が、彼を包む一種奇妙な雰囲気の原因であることは確かとしても、しかし、実際には、彼に自己の存在の虚偽性——親子関係——を直視する勇氣がないことに彼の絶望の真に絶望的な所以があることには、彼は気づいていない。このことが、この場の彼の不覚の「思いやり」の示すことである。それが彼の陥るアイロニーである。だから、セルビー夫人が去ったあとヤルマールが、ヴェルレとセルビー夫人の結婚こそ隠し事のない理想的な結婚であって、それでは悪人が正しいことになり、神の正義に合わないと言くと、グレーゲルスにはどう反論の仕様もない。若し彼が、父と母の虚偽の結びつきとしての自己の虚偽性の底に、なお親と子の絶ちがたい関係を見ることができれば、即ち自己嫌惡の向こうに、なおその自己の存在のよってくる因を直眼することができればなら、父の再婚に対して、客観的な判断が下せるはずである。グレーゲルスはヤルマール同様の不満を感じながら、それをどうすることもできず、そのままごまかしてしまふ以外ない。そういうこ

まかしはセルビー夫人との会話の中にもすであつた。

グレーゲルス あなたは僕があなたの昔の交友関係について父に話をするかもしれないとは全然恐れていないんですか。

セルビー夫人 わたくし、自分からあの人に話してあげますわ。

グレーゲルス そう？

セルビー夫人 お父さまは、わたくしについて人が知っていることならすべて存じていらっしゃいますわ。全部話しましたのよ。あの人がわたくしに気のあることを見せたとき、最初にわたくしのしたことがそれですの。

グレーゲルス それじゃ、あなたは普通の人よりあけっぱいりげのようですね。

グレーゲルスの最初の質問を脅迫じみたものといつては言いすぎであらうか。しかし医者とのレリングとセルビー夫人の会話から、昔の彼等の普通以上の関係を聞き取ったグレーゲルスが、ここにいささか意地悪い喜びの調子をこめていることは否定できない。ただ、セルビー夫人の答え

は彼の期待を全く裏切るものである。彼はやゝ押され気味のまゝ、最後の皮肉めいたせりふで自分の不利をごまかす以外なす術を知らない。

このあとヤルマールはセルビー夫人がヘドヴィクに渡し、手紙を読み、グレーゲルスが危惧した通りの衝撃を受けて家をとび出す。またもや二人だけ残されたヘドヴィクとグレーゲルスの会話は、すぐさま野鴨の方に話題が移っていく。これは第三幕での二人の会話の始まり方と殆ど同じ形である。あのとき彼等を結んだのは野鴨の環境に対する二人の同じ感受の仕方であった。即ち「海底(havens bunne)」という言葉であった。だがここで二人をつなぐのはよりアイロニカルなものである。ヘドヴィクからヤルマールの野鴨をしめ殺したいという願いを聞くや、たちまち野鴨はグレーゲルスにとって彼自身の内部の野鴨的なものに変様する。彼は奇妙な論理、というより、その場の感情的雰囲気を利用して、ヘドヴィクに野鴨を殺すことがヤルマールの愛をとり戻す唯一の手段であるかの如く思い込ませてしまう。

ここでもう一度第四幕が始まったときの部屋の明るさを感じ起こす必要がある。舞台は今ランプのほの暗い明りに照らされている。ヘドヴィクが野鴨のためにする晩の祈り

の話は、この舞台の雰囲気合致するだろう。それは朝の光の下では駄目である。ヘドヴィクも朝にはお祈りをしない。この夕暮の暗さの中でこそ、グレーゲルスは野鴨を生贄に供する考えを何の抵抗もなくヘドヴィクの頭の中にはめ込むことができる。グレーゲルスは果してこのごまかしを意識しているのか。

一体グレーゲルスは何故ヘドヴィクに野鴨を殺すよう説得するのか。ヤルマールが家を出ていったのは、ヘドヴィクが自分の子ではないとわかったからなのだから、彼女が野鴨を自ら生贄に捧げれば、ヤルマールがまた彼女を愛するようになり家に戻ってくるという理窟は筋が通らない。

「世の中で一番大切にしているものをすすんで生贄に捧げるなら」と言うグレーゲルスも、「それが役に立つと思う？」とヘドヴィクに問われると、「やってごらんよ、ヘドヴィク」としか答えられないのである。ヘドヴィクはやらうと決心する。だが彼女の決心が論理的納得の上に立つものでなく、彼女の晩の祈りのように、ほの暗さの中の呪術性ともいふべき力によるのは明かである。朝の光の中では、その非論理的な呪術性は魔力を発揮できない。そのことは次の幕で問題になる。

グレーゲルスは、ヤルマールの虚偽に満足している弱さ

を野鴨的なものと呼んでいた。彼はヤルマールの中のその野鴨を殺したがっていた。グレーゲルスにとって野鴨殺しはヘドヴィクのためというより遙かにヤルマールのためである。そしてヤルマールのためとは、自分自身のため故、これはグレーゲルス自らのための行為に他ならない。これが彼の実際の論理である。それに彼も気づいている。少なくともあるうしろめたさを感じている。だから彼はギーナには黙っているように言い、何故と聞かれると、彼女は理解しないからと答えるが、実は逆に、散文的なギーナが彼の非論理の奥にあるものを本能的に見抜いてしまうことを恐れているからではないか。

グレーゲルスが殺したい野鴨とは、自己の内部の野鴨である。それは虚偽としての自己の存在自体を抹殺したい衝動を呼ぶ。彼の自殺のほめかしもその表われであった。だが若し彼がこの意味での野鴨を殺したいなら、何故自分の手でこの野鴨を殺そうとしないのか。ヘドヴィクが行なうことによって、彼女とヤルマールの関係が元に戻るだろうというのは正しくない。何故ならここでヘドヴィクは、実際に射つのお祖父さんに頼もうというのだから。グレーゲルスには自分の手で野鴨を殺すことができないのである。彼は自己の虚偽性に苦しみ、虚偽のつながりと

しての父子関係を絶そうとし、虚偽そのものとしての自己の存在を庄殺したいと願ったとしても、彼が一たん生れた以上「グレーゲルス・ヴェルレ」の名を自分から拭い消すことはできない。その絶望を絶望として嘆くことが決して絶望を自己に背負うことにはならない。そのことにまではグレーゲルスは思い到らないのである。父から金銭的に独立しようとしながら、貯めた金も所詮父からのものであることを無視したように、彼には自己の野鴨性を、自ら直視しそれをしめ殺すだけの勇気がない。だからグレーゲルスの言葉には常にあるあいまいさがつきまとう。そのあいまいさの持つ魅力にヘドヴィクはまどわされたと言えるだろう。

グレーゲルスがヘドヴィクを一種の罠に陥れたことを、第五幕で、死んだヘドヴィクを診察するレリングは断言する。客観的にはレリングは全く正しい。だが、これが罠であることを自らも意識していなかったところにグレーゲルスのアイロニーがある。彼も最後にはそれに気づくかのようである。彼とレリングとの第五幕幕切れの対話がそれを暗示する。しかし、その前に、この作品の主題と一般に考えられている問題、即ち弱い人間に真実を教えることの是非について議論をする二人の会話が、もう一度グレーゲル



スの内面の深みを我々にのぞかせることを我々は知るだろう。

## 五

イプセン写実劇のなかで、筋の進行と直接関係せず、作者の代弁的意見を述べて劇の主題を明かにするように見える人物は「野鴨」におけるレリング以外みあたらない。(傍観者の立場にあつて、筋進行のための一種の聞き手になる人物は居る。) そういうレリングの役割が最も明白なのは、或いは、明白そうに見えるのは、第五幕に於ける彼とグレーゲルスとの場面においてである。

ここでのレリングの言葉がイプセン思想の代弁にみえるのは、その内容のまぎれもない正しさと、その言葉の調子とにあるのだが、同時に、その言葉が向けられている相手たるグレーゲルスのこの幕初めの殆ど愚劣ともいえる言動にもよるのである。家出したといつても、実際にはレリングやモルヴィクと飲みに行ったにすぎないヤルマールが、レリングの部屋で寝ていると聞くと、「わかりますね、あんな魂の危機を経験したあとには——」と言うグレーゲル

スに、我々は何とも馬鹿々々しい滑稽さを感じるだろう。この滑稽さはグレーゲルスとレリングが二人だけになってからもしばし続く。しかしながら、「ヤルマールのような男が——」と彼の評価を変えようとしないうグレーゲルスの滑稽さが、自己評価をやめないヤルマールの滑稽さにはない内面の複雑さを秘めていることも否定することはできない。ただ、そういう複雑さを見るのが誤りであると思わせるほどに、或いは、そういう複雑さを見ることが誤りであると思わせるほどに、ここでのグレーゲルスの言葉の馬鹿さ加減は甚だしい。そうしたイプセンの意図はどこにあるのか。

ヤルマールを育てた未婚の叔母達のことを話したあと、グレーゲルスとレリングは次のような言葉をかわす。

レリング ……エクダルの不幸は、彼がうちうちの

中でいつも光と抑がれていたことですよ。

グレーゲルス その通りかもしれないじゃありませんか。奥の奥までつき入ってみればね。

ここでヤルマールを「光 (lys)」と呼ばせていることにイプセンの特別な意味づけがあることは疑いない。第一幕以来、舞台上の明り (lys) に関しては厳密な指定がなされ

てきている。第四幕の薄暗さに対してこの第五幕は、朝の光に照されている。(このことの意味はあとで明かになるう。) ヴェルレはことさらにランプの火(YS)を避けねばならぬほど眼が悪くなっていた。そしてグレーゲルスはヤルマールが真暗い毒気のある沼の底で死にかかっていると言い、そこから彼を救うことが自分の使命だと言ってきた。つまり、自分こそヤルマールにとっての「光」なのだとグレーゲルスは考えているはずなのである。

しかし、ヤルマールを救うことは、実はグレーゲルス自身のために他ならず、自分がヤルマールにとっての光であることは、より深い意味で、ヤルマールがグレーゲルス自身にとっての光とも言えるだろう。「奥の奥までつき入ってみればね」と言うグレーゲルスは、そこまで意識している。そのことはこのあとに続く二人の会話から明確にうかがえるのである。レリングにはそこまでは理解できない。彼は老エクダルの子供のような心について揶揄するが、グレーゲルスの言う通りレリングには子供の心は理解できないのである。彼の理解は所詮医者としての外的診断によるものでしかない。第四幕でヘドヴィクの思春期の精神不安定について忠告したときも、それがグレーゲルスとの特別のつながりを形成するある種の詩性を有すること(例えば病

的な詩性であろうとも)にまで観察は行き渡らなかった。ここでも老エクダルの子供のような心が、最後のヘドヴィクの死を眼前にしても揺がない詩的幻想力(「森は復讐する」)を持つものであることは診断できないのである。それが、例え第三者の立場にあるとはいえ、ヘドヴィクの危険を予見しながら何らその対策につくそうとしない彼の無行動の理由であろう。彼は第三幕すでにグレーゲルスの「理想主義」に宣戦を布告していた。若しレリングがグレーゲルスを批難するなら、そのグレーゲルスのやり方を見抜きながら手をこまねいていたことの自らの責任を感じるべきである。だが、グレーゲルスの理想主義は、決して理想主義ではないことを我々は見てきた。レリングの批難は全く筋違いのことでしかない。

勿論、脇役であるレリングを全人格的な人物として論じるのは正当ではないだろう。イプセンのレリングを持ち出す意図もそこにはない。ただ、レリングの言葉をイプセンの代弁とするには、レリングの言動にあまりに矛盾がありすぎるということである。彼はあくまで傍観者でしかない。すでに述べたように、グレーゲルスの外的滑稽さの奥に潜む彼の存在にかかわる複雑さの明示のために居る。ヤルマール礼讃を執拗にくり返すグレーゲルスの愚劣さは、

第三幕での父親との対話に我々が垣間見たのと同じ意識の様相を示すのである。

レリング 失礼ですが、あなたが偶像視して、あがめているものも、内を探ればそんなものなんですよ。

グレーゲルス 僕がそれほどに全くの盲だったとは思いませんでしたがね。

レリング でもそうなんです。大して違いはないですな。何故ってあなたは病いにかかっているんですから、あなたもね。

グレーゲルス それはあなたの言う通りですよ。

レリング そう。あなたのケースは複雑なんです。先ずこのわずらわしい正義熱。もっとわるいのは——いつも崇拜病にかかっていること。いつもあなたは自分自身の外に何か崇拜物を見つけるんですよ。

グレーゲルス え、確かに、僕自身の外にそれを探さなくちゃならないんです。

比喩的にも事実としても、ヴェルレが盲になることは第

一幕以来くり返し示されてきた。第二幕になると、ヘドヴィクが盲になることを聞かされた。ヴェルレの息子たるグレーゲルスにも盲になる可能性はある。肉体的ではなくとも、彼の眼が正しく物事を見ることができないことの比喩的表現はなされてきた。それが正しいことを我々は見てきている。従ってここでグレーゲルスが、自分が盲だったとは思わないと言うとき、我々は直ちに彼とヴェルレとのつながりを感じ、同時に彼が否定する盲目性のもう一つ奥の盲目性に思い到る。つまり、グレーゲルスはヤルマールに対する自己の眼が盲であることに気づかないではないにも拘らず、なおかつ盲ではないと考えざるを得ないその盲目性である。彼自身も気づかないではないという意識は、第三幕でヴェルレに見せた意識であり、ここでレリングの「あなたは病気だ」という言葉を肯定する意識といえるだろう。常に、自己の外に崇拜者を必要としていると言うのも、ヤルマール礼讃が究極的に自分のためであることを意識していることに他ならない。それらすべてにも拘らず、なおも、彼はヤルマールを秀れた男と見なそうとする。それは、もはや彼自身にも説明できない部分からくることに違いない。

「野鴨」は「普通の人間から生活の嘘を奪うなら、彼の

幸福も同時に奪うことになる」という物語ではない。そういう生活の虚偽と闘おうとするグレーゲルスの陥る別の虚偽の深さを示す作品である。グレーゲルスは、ヤルマールの幸福を「生きていることの嘘 (livsløgne)」で保護しようとするレリングに戦いをいどむが、それは第三幕でのレリングの挑戦への返しと言えるだろう。レリングは手をこまねいて見ていた。グレーゲルスは実際にヤルマール救済の手を打つ。レリングが野鴨について一言もしないのは不思議であるが、彼は所詮野鴨と何の関係も結ばない傍観者なのである。成程、彼は去り際に、現れたヘドヴィクに向かって、「野鴨のお母さん」と言う。しかしこの言葉は、次のヘドヴィクとグレーゲルスの対話を不自然でなく野鴨に移らせるための方便以上のものではない。

さきに述べた、この幕が早朝であることの直接の効果は次のヘドヴィクのせりふからくる。

……あたし、今朝早く目を覚ましてあたし達が話し合ったことを思い出したら、それがとてもおかしい考えに思えたの……昨晚はすぐさますばらしい考えだと思っただけど、眠ってからもう一度思い返してみようと、大して価値のあることに思えなくなってしまった

のよ。

グレーゲルスの野鴨殺しの論理があいまいであることについてはすでにのべた。それがヘドヴィクを動かしたのはあの夕暮の雰囲気によるものであった。今、朝の光がふりそそぐ中で、グレーゲルスの非論理性はヘドヴィクにさえ覆うべくもなく感じられる。世界中で最も大切にしているものを生贄に捧げれば父が戻ってくるという呪術的感覚の奥に潜むグレーゲルス自身の願望——自己抹殺の願望はヘドヴィクのものではないだろう。虚偽の結婚の証しとしての自己から脱れることがヤルマール救済によって成就するものではないこと、他人の真実性によって自己の真実性が獲得できるものではないことを、グレーゲルスは意識の下において感じているはずである。唯、彼にはその真実の獲得が絶望的であり、それは彼の願望の向こう側にある（若しあるとすれば）ことを知らないのである。その点に彼のアイロニーがあった。そのアイロニーを彼は常に意識的に回避する。ヘドヴィクの疑問に対しても彼は同じような対し方をするのである。「あゝ、いやいや、あなたは大きくなったばかりに、あなたの中にある何かを無駄に失くしてしまったんだ。」

ヘドヴィクの何が失われたというのか。グレーゲルスが彼女の成長について云々するのは、二人の異常な幼さを見てきた我々には奇妙に感じられる。この言葉は、第四幕でセルビー夫人とヴェルレの結婚が真の結婚のように思えることの不正義をヤルマールが口にしたときの、グレーゲルスの逃げ口上を思い起させる。「それは全然別だよ、ヤルマール。」あのとき何が別なのか説明できなかったグレーゲルスの言葉をヤルマールがとり合わなかったように、ここでもヘドヴィクは彼の神秘めかした説明に注意を払わない。「そんなことは、あたし気にしないわ……」彼女は唯父親が戻ってきさえすればよい。グレーゲルスが利用する余地はそこにしかないだろう。「僕はまだ君を信じているよ、ヘドヴィク」という彼の去り際の言葉は、ヘドヴィクになんとなく父を取り戻すことの手段としての論理的納得のようなものを、この明るい部屋の雰囲気の中でさせてしまふのである。彼女が何故野鴨の代りに自分の胸を射つのか、それは誰れにもわからない。彼女が屋根裏へ入る前の最後のつぶやきである「野鴨!」という言葉をいかに発するか解釈の分れるところである。グレーゲルの自己抹殺の願望の影響、少なくとも、思春期の少女の非論理的な自殺への衝動の表われであるとも言えようし、その前のヤルマ

ールの最終的な拒絶の態度に絶望したとも言えるだろう。或いは、あくまで野鴨を射つつもりが、その直前に心変りしたのかもしれない。そういう穿鑿は殆ど意味がない。ヘドヴィクの死が舞台裏で行われたということは、そのときの彼女の心境をイプセンは問題にしていけないということだからである。彼女の死を前にして誰一人彼女の心を思いやる者はいない。レリングもその点例外ではないのである。彼女の死は、グレーゲルスがそのかしたものととして、また、ヤルマールとギーナに与える効果として意味付けられているのみであることに注意すべきである。

ヘドヴィクに、野鴨を生贄に捧げればヤルマールは戻ってくると言ったとき、グレーゲルスは本当にそう信じていたのか。この論理の通じないことはさきに述べた。しかしヤルマールは今、自己の絶望の心底の原因がヘドヴィクへの不信にあると言う。即ち、グレーゲルスの非論理的な考えが、正しく適確なものであったということになる。逆に言えば、グレーゲルスの考えがおかしいように、ここでのヤルマールの言い分も全く理に合わないものである。我々にとつてはこの両者の奇妙さが互いを守り、第四幕以来の筋の進行の核としてのヘドヴィクの野鴨殺しを、自然なものにしてしまふのであろう。それは突然筋の中心となる野

鴨殺しを正当化するためのイプセンの偽瞞的技巧であるともいえる。

しかしながら、ヤルマールの絶望の家出は、ヘドヴィクが我子ではないという疑いから来たのであって、彼女が彼を愛しているかどうかの疑問故ではないことを、なにもイプセンが隠そうとしているわけではない。グレーゲルスの非論理性を真似るヤルマールの非論理性によって、両者が我々にとって自然に受け入れられるものになると同時に、その奇妙さが一層際立つことも事実である。このことはヤルマールの言葉に対するグレーゲルスの驚きが端的に表現している。

ヤルマール 俺は馬鹿なことに、あの子が俺を信じていると思ひ込んでいたんだ。

グレーゲルス 君は本当にヘドヴィクが君に不実だったなんて考えられるのか！

ヤルマール 今はそうだと考えられるんだ。ヘドヴィクなんだよ、ひっかかっているのは。あの子が俺の人生から太陽をしめ出してしまった。

グレーゲルス ヘドヴィク！ ヘドヴィクのことを言っているのか！ どうして彼女が君の遮りになる

んだい？

グレーゲルスはヤルマールの言葉を予想していなかったのか。とすれば彼はヘドヴィクに言った理窟を自分でも信じていなかったことになる。或いは、あまりに予想が的中したことに驚いているのか。このあとヤルマールはことさらに、グレーゲルスの「問いに答えず」という卜書がついて長々したヘドヴィクへの恨み言を述べる。その感傷性の滑稽さは、「言いようもなく (usigelig)」というかなり詩語的な強調の言葉が四度くり返されることにもはつきり意図されている。グレーゲルスとヤルマールの滑稽さは互いに相手のそれを増幅する役目を荷なっているといってもよい。

ヘドヴィクの死を見つけて狼狽するヤルマールやギーナや、呼び込まれるレリング等の混乱の間中、グレーゲルスは何も口をはさまない。唯一言、哽れ声で「海底で——」とつぶやくのみである。このつぶやきは、グレーゲルスと野鴨との関係を結論づける。野鴨は海底に住むはずはない。しかしそこを海底と感じる感受性の持主は、その虚偽故に生きていることを許されないのだろう。ヘドヴィクは死んだ。グレーゲルスも、彼の絶望から脱け出るためにはこの海底を出なければならぬ。それはいかなる方法によ

るのか。二人残ったグレーゲルスとレリングのしめくくりの対話は、作品全体の結論でもある。やゝ長いが引用しておこう。

レリング（グレーゲルスの方へ行つて言う）これが偶然だなんて言つてもわたしは絶対に納得しませんよ。

グレーゲルス（驚愕の中に立っていたが、顔を引きつらせて）この恐ろしい事がどうして起つたのか誰れにも言えません。

レリング 火薬が洋服をこがしていますよ。あの子は直接にピストルを胸にあてて射つたんですね。

グレーゲルス ヘドヴィクの死は無駄じゃなかった。悲しみがどんなに彼の中の崇高さをひき起したか見たでしょう？

レリング 大ていの人々は死体を眼前にすれば崇高な気持になるものです。でもその敬虔さがどのくらい続くと思つていますか！

グレーゲルス 一生続いて次第に高まっていかないと言うんですか！

レリング 九ヶ月も立たないうちに小さなヘドヴィク

は彼にとつていい演説の種になってしまいましたよ。

グレーゲルス ヤルマール・エクダルに對してよくもそんなことが言えたもんだ！

レリング あの子の墓に最初の草が生えたときお話ししましょう。そのとき彼が、「早くして父の心を離りし子供」について一席ぶるのを聞くでしょうよ。自分に感動し陶醉し嘆くのを見るでしょうよ。まあ、見ててごらんさい！

グレーゲルス 若しあなたが正しくて僕が間違っているなら、人生は生きる価値がない。

レリング あゝ、人生は十分すばらしいものですとも、ただ、我々貧乏人の戸口へやってきて、理想の要求とかをやらかすくでなし達から脱れてさえいればね。

グレーゲルス（空をみつめ）それなら、僕は自分の運命が決して喜んでいます。

レリング 失礼ですが—あなたの運命とは何ですか？  
グレーゲルス（行きかけて）食卓に座る十三人目になること。

レリング あゝ悪魔に喰われる。

グレーゲルスとレリングのどちらが正しいかがここでの問題ではない。「若しあなたが正しくて僕が間違っているなら……」というグレーゲルスは殆ど相手の言い分を認めているといつてもよいだろう。事実、レリングの言葉はすべて正しい。グレーゲルスにとって残された道は食卓の十三人目となることのみである。彼が背負っている存在の虚偽性は、もはや他人によるいかなる行為によつても正されることはない。そのことを今ようやくグレーゲルスは気づいたかのようにある。ヘドヴィクを死なせたことは、彼の行為自体をも虚偽そのものとする。彼が父から離れることで自己の虚偽性から脱しようとしたのも所詮は空しい努力でしかなかった。彼のエゴイズムが一人の少女に死を選ばせた以上、彼自身の人生はもはや生きることを許されない。彼は、自己の虚偽を抹殺するには自己を抹殺する以外ないことを再びここで確認するのだが、その確認の仕方は、隔絶したつもりの父とのつながり自体の確認以外にないのである。食卓の十三人目という一幕でのヴェルレの言葉をくり返すグレーゲルスは、明らかに絶ち得ない親子関係を意識している。しかし、この父の言葉を実行することでしか、彼には父との結びつきから分離することもできない。この

アイロニーは、この作品におけるグレーゲルスの姿を最終的に照らし出す。しかも、ヘドヴィクの死にもかかわらず屋根裏へ入っていった老エクダルの言葉が示すように、野鴨は合衆らず壁の向こう側に棲息している。野鴨が生きつづける如く、人間存在を基盤づける親と子の関係の中に我は生きつづけている。そのことに直面することなく、我の真の自由性はない。グレーゲルスが自由を獲得したかどうか、これからするかどうかはわからない。しかし、彼は、自己を嫌悪するのみであるかぎり真の自由に到達しないことに今まで気づかなかったのである。彼は甘じて自己の運命を受け入れる。だがそういう彼の到達点が、一人の少女を死に到らしめ、一家族を無惨に破壊したことの結果であることを見逃がすわけにはいかない。グレーゲルスはユダである。しかし、ユダとなる以外、この世に於ける自由獲得の道はない。このアイロニーはイブセンの生涯の問題でもあった。